広島大学 大学院 人間社会科学研究科 教職開発専攻（教職大学院）
▶学校マネジメントコース
▶教育実践開発コース

News Letter（ニューズレター）

No. 06
2023年3月発行
WEBサイトはこちら▼

お問い合わせ／広島大学大学院 人間社会科学研究科 教職開発専攻（教職大学院）　広報担当：寺内大輔
東広島市鏡山1-1-1　TEL：082-424-7146　e-mail：terauchi@hiroshima-u.ac.jp　https://kyoshoku.hiroshima-u.ac.jp/

教職大学院での2年間をふりかえって

広島大学教職大学院における2年間の学びは、これからの教員人生に多大な影響を与えるものであると思います。2年間のアクションリサーチ実地研究では、中学校理科において科学的概念の理解を促すAR教材の開発と指導法の考案を行いました。入学当初は教育学研究の経験がまだあまりありませんでした。しかし、主指導教員の木下博義先生や理科ゼミの大学院生、実地研究校のメンターの先生方の協力を得て、研究を進めることができました。また、マレーシアの国際学会での発表や現職教員院生を含む多様な院生との授業検討、授業外での勉強会などから、多くのことを学びました。研究や授業が上手くいかず、悩むこともたくさんありました。しかし、大学院生、特に私たち6期生はともに高め合える存在であったため、院生室でたくさん相談しながら研究や授業の改善に努めることができました。

6期生代表　**藏富 航輝**

【2022度修了生（6期生）論文題目（一部）】

- ●小学校社会科における子どもの切実性を高める発問と授業の開発
- ●小学校国語科における論理的に「書くこと」の指導
  ー様々なビジュアル・ツールを活用してー
- ●理科教育における情報活用能力育成に関する研究
- ●教師の情緒的消耗感を軽減させる研修に関する研究
  ーアセスメントをもとにした児童生徒理解による自己効力感の変化とソーシャルサポートが与える影響ー
- ●「自立に向かう生徒」が育つカリキュラム・マネジメントに関する研究
  ー吉本均の学習集団づくり論に着目してー

学校マネジメントコース アクションリサーチ構想発表会

学校マネジメントコースでは、毎年12月にアクションリサーチ構想発表会を行っています。ここでは、現職教員の1年生が、設定した自らの研究テーマとその構想を発表します。この発表を通して、発表者は、自らの研究が所属校にとってどのような意義があるのか、そこで自分の役割は何か、といったことを強く意識することになります。そうした意識は、実践を具体化する大切な土台となります。各発表者の研究テーマは、下の論文題目表をご覧ください。

【2022年度学校マネジメントコース1年生 論文題目】

橋本 嘉文
挑み続ける教職員が育つ学校づくりに関する研究
ー目標管理を生かした仕組みの構築を通してー

中原 宏美
「主体的に学ぶ児童」が育つカリキュラム・マネジメントに関する研究
ー学びの深さ(学力・学習の質)に着目してー

長光 優樹
「思い」のマネジメント(Management By Belief)を基盤としたカリキュラム・マネジメントに関する研究
ー「キャリア形成」と「探究」の一体化を通してー

授業紹介

『学校の経営戦略と評価』

担当：**曽余田 浩史先生・米谷 剛先生**

「学校の経営戦略と評価」は、学校ビジョンの形成と実現および学校評価の実践的力量の育成を目指した授業です。現職院生の所属校の経営計画や学校評価表を事例として、学校の歴史を多様な視点で分析し、学校の核となる価値（実践に現れる価値観、重要な伝統、学校の強み、潜在力など）を見出します。これを軸にどんな学校になりたいかというビジョンを描くとともに、ビジョン実現に向けてどのように学校づくりを行っていけばよいかを検討します。

学校がどのように歩んできて、現状はどこにおり、これからどんな学校を目指していくのか。授業を通して、学校の教育活動の一つ一つを「点」ではなく「線」で捉えて学校づくりを行うという考え方を、実践的に学ぶことができたと感じています。

執筆　**橋本 嘉文**　●学校マネジメントコース1年

『マイクロティーチングの実践』

担当：**木下 博義先生・木佐木 太郎先生**

マイクロティーチングとは、教師が授業力の向上を目的として、通常よりも規模を縮小して授業を行うトレーニング方法のことを指します。本講義では、6人程のグループに分かれ、協力して授業を構想し、他のグループを子ども役とした模擬授業という形でマイクロティーチングを実施します。

本講義は、「授業の開発・改善」がキーワードとなっています。各グループは提案性のある授業の開発を目的として、校種・教科が様々なメンバーが専門知識を共有します。多様な視点から考えることで新しい発想が生まれ、授業開発につながります。そのようにして開発した授業を行った後、全体協議会で意見を出し合います。授業を実施して感じたことや他のグループから出た視点を基に改善点を整理し、再度授業開発・模擬授業を行います。この開発・実践・改善が本講義の特徴となっています。私は、本講義で「授業を開発・改善する」「授業を受ける」ことを通して、周りと豊かに関わり、自分にない角度からの思考に触れて、視野を広げることが出来たと感じています。校種・教科の壁を越えて協働することの重要性を改めて認識する機会になりました。

執筆　**伊達 春人**　●教育実践開発コース1年

院生の研究内容を紹介します！

社会に参画しようとする態度を育成する総合的な学習の時間の単元開発
ーサービス・ラーニングを取り入れた地域課題の探究を通してー

山下 喜子 ●教育実践開発コース2年

研究の目的は、小学校の総合的な学習の時間において「社会に参画しようとする態度」の育成を図ることをねらいとした、地域に根ざした単元開発を行うことです。そのために私は、ボランティア活動と教室での学習を融合した、よりよい地域社会の実現を目指す市民性育成のための手法である「サービス・ラーニング」に着目しています。

所属校の3･4年生の実践では、「東野スマイルプロジェクト」の単元開発を行いました。単元目標は、野菜の栽培活動を通して、地域の方を笑顔にするために自分たちにできることを考え、実践力を育てることです。子供達からは、「育てた野菜で料理をし、お世話になった人に食べもらいたい」「たくさんの地域の人に野菜を販売したい」等の思いが表出されました。

この研究で期待されている成果の1つ目は、「実現したい」と思い実践したことが、地域の方に喜んでもらえ、子供達の達成感や有用感につながることです。2つ目は、その達成感や有用感が、「もっと地域の人を笑顔にするには」と新たな課題につながることです。これまでの研究では、その成果の一端を見取ることができました。

何をもって「社会に参画しようとする態度」が育成できたか解釈することは難しいことですが、今後も子供達の思いを引き出しながら研究を続けていきます。

収穫した野菜の販売活動

高校英語の授業を通して深い自己肯定感を育むための研究
― 英語表現活動における失敗への不安に着目して―

上野 聡子 ●教育実践開発コース2年

生徒が自信を持って生きていくために、学校教育を通して自己肯定感を育むことが求められています。私は、自分の良いところも悪いところも含めてありのままを認めることが重要であると考え、その「深い自己肯定感」を高等学校の英語の授業で育むことを研究の目的としました。英語の授業では英語で書いたり話したりする場面が多く、生徒は失敗への不安を抱くことが多いです。「失敗は悪いものだから失敗したくない、失敗がこわい」という失敗への不安を減らすことができれば、ありのままの自分を認めることにつながると考えました。そのため、失敗への不安に着目して調査や授業実践を行いました。授業実践①では、ペアでの英作文交流･相互フィードバックを行いました。活動前には失敗への不安をもっている生徒が多くいましたが、活動後には、「相手の考えが知れておもしろかった」「改善点を伝え合うことでお互いの学びになった」という感想が多くみられました。授業実践②では、傾聴的態度の指導を取り入れたペアでの英語会話活動を行いました。生徒たちは受容的な雰囲気で前向きに活動に取り組んでおり、「うまく話せなくても相手が助けてくれたから不安が減った」という感想が多くみられました。

この授業実践を通して、生徒の「失敗ははずかしいことだ」という意識を軽減することができました。今後も、生徒が「間違えたり失敗したりする自分でもいいんだ」と思えるような授業を考えていきます。

ご指導いただいている先生方の教育・研究

ノーリミットで考える

学校マネジメントコース
滝沢 潤 先生
たきざわ　じゅん
大学院人間社会科学研究科 准教授
専門分野：教育行財政学

滝沢先生のご専門は教育行政学で、これまでアメリカ合衆国の連邦及びカリフォルニア州の言語マイノリティ教育政策を対象に、（英語を第一言語（母語）としない）言語マイノリティの平等な教育機会をめぐる教育統治と多様な教育理念を保障する学校制度のあり方を研究されてきました。また、日本においては、大阪府市における教育行政改革の展開と課題などについて研究されています。先生は、大学での研究のみならず、広島県内の市町村の教育行政評価や学校規模の「適正化」に関する委員会の委員長を務めておられたり、メディアでご自身の見解を述べたりするなどされています。このように学術界から一歩外に出ることにより、市民社会との対話を深め、ご縁を紡いでいくことを大切にされています。

インタビューの中で、滝沢先生は「ノーリミットで考える」ことの必要性を強調されていました。実践的に考える上で、一定の枠組みをもとにすることは必要です。一方で、いろいろなことが不透明で不確実な時代だからこそ、枠組みそのものを疑い、理論的に制限をかけないことが、学びの広がりを可能にするとも仰いました。教育に携わる中で、私たちは児童生徒やその保護者、地域の方々、同僚などとの多くの出会いがあります。立場の違う他者との関わりにおいて、無意識に作っている自分自身の「枠」の存在に気付き、物事を柔軟に捉える姿勢を大切にしていきたいと感じました。

教育行財政学研究室（滝沢研究室）のゼミの様子

執筆
服部 美紀
●教育実践開発コース1年

障害と美術

教育実践開発コース
池田 吏志 先生
いけだ　さとし
大学院人間社会科学研究科 准教授
専門分野：美術教育･障害とアートの実践研究

池田先生は、障害と美術の複合領域を研究テーマとし、特別支援学校や特別支援学級のみならず、広島県、県立美術館、県立博物館、NPO等と連携したワークショップや展覧会等を実施されています。「美術には、曖昧で不確定なものや人との違いを肯定的に受け入れる土壌があり、一般的な常識や価値観を広げたり問い直したりする可能性がある」とおっしゃいます。そのような考えは、先生が学生時代から従事されてきた彫刻制作に源流があり、何らかの媒体や手法を通して創造的に新たな提案をしていく点で研究と作品制作はよく似ていると話されました。今後は、「多様な人達が社会参画できる美術教育を目指したい」と抱負を語られ、研究や実践を楽しまれている様子が伝わってきました。

池田先生は、大学を卒業された後、10年間彫刻活動に従事されていたことをお聞きし、彫刻に対する強い思いを知りました。私は、自分の好きな事や興味関心を大切にし、時間をかける事、目の前のことに一生懸命取り組む事のよさを痛切に感じました。大学院の生活を通して自分の軸を追求していきます。

池田先生の作品
「僕の声が聞こえるかい」

執筆
小佐古 澪
●教育実践開発コース1年
平田 剣士郎
●教育実践開発コース1年

日本と海外の視点、バランスよく!

教育実践開発コース
木下 博義 先生
きのした　ひろよし
大学院人間社会科学研究科 准教授
専門分野：理科教育･メタ認知･教師教育

私たちは普段学びを深める中で、自分の領域に囚われていないでしょうか。教職大学院に来て、異校種の方との交流の大切さを実感しています。しかし、木下先生の話を聞き、海外の視点にも目を向けてみたいと感じることができました。

木下先生は、広島県の様々な教員と大学と共に「JICA草の根技術協力事業」に取組んでいます。実際にカンボジアに足を運び、現地のカンボジアの先生方と一緒に模擬授業や教材研究、公開授業を行っておられます。現在はカンボジアでの教育大学設立に携わっておられるそうです。そのような経験から海外の方に対して英語で発表する機会が多く、発表の際には海外から見た日本の教育に関する意見などをもらうことができ、様々な視点で考えることができると話しておられました。

木下先生のインタビューから、日本だけでなく海外や異なる校種にも視野を広げていくことで、自分の当たり前のことを批判的に思考することができるようになると感じました。しかし、海外に振り子を振りすぎると、現場の声に耳を傾けることができなくなります。日本と海外についてバランスよく研究することで、将来につながっていくことを改めて学ぶことができました。

ゼミ生と共に
海外に行かれた時の様子

執筆
田中 佑明
●教育実践開発コース1年
藤本 芙沙子
●教育実践開発コース1年

編集後記／第6号

担当／**服部 美紀** ●教育実践開発コース1年

広島大学教職大学院ニューズレター第6号をご覧いただき、ありがとうございます。今回の号では、マネジメントコースの構想発表会、修了生の研究を中心に取り上げました。教職大学院では、コースや校種･教科等を超えて、教育を軸としたさまざまな人のつながりを作ることができます。ここで得られたつながりを、今後の人生においてもずっと大切にしていきたいと改めて感じました。